

現代の村落生活における 集団構成と近隣関係

— 福井県坂井郡坂井町高柳の事例 —

東北大学教育学部 松 岡 昌 則

現代の村落研究における課題の一つに、地域連帯再生の問題がある。それは住民の側からの村落の再編成（再組織化）の可能性をめぐって、村落再編の担い手および活動の性格規定と連帯基盤の究明がはかられているのであるが、とりわけここでは、地域居住組織の現代的意義の解明が重要な鍵を握るものとなっている。本報告は、以上の点をふまえながら、村落生活協同の変化の過程を、農民が形成する集団の構成とその基底に存する近隣諸関係との関連において提えることによって、現代における地域連帯の諸相を明らかにすることを意図している。

坂井町は福井平野の北部に位置し、昭和五〇年センサスでは耕地の水田化率が九七・三%を占める典型的な米作伴農村である。昭和三〇年三ヶ村の合併、同三一年木部村の合併、そして同三二年の木部村の一部分村の経過を経て現在にいたっているが、高柳はこの木部地区の中心部落である。もともと木部地区は九頭龍川と兵庫川の河間地帯にあたって、周囲を堤防にかこまれた輪中の性格を強くもち、ひとつの地域的結塊を形成していた。しかし現在では、高柳を

含む西側九部落が坂井町に、東側八部落が三国町に属し、本部地区のまとまりを複雑にしている。

さて高柳は戸数七一戸、うち農家六一戸非農家一〇戸であり、本部中心部落として各種の施設が配置されている。農家の一戸当平均耕作面積は一・六二町であり、福井県では上位に属する。もともと第二種兼業化への傾斜はいちぢるしく、専業農家はない。

ところで、農民の生活過程を考えた場合、その基底に生産・労働があるが、それを具現化する過程に農民相互のつながりが介在する。まず農業をめぐる農家相互の関係をみると、高柳には「機械仲間」と称する農機具の共有関係があつて、それぞれの農機具ごとに、二戸から五戸程度で、部落内縦横につくられている。昭和五三年の総数三四のうち、部落外との関係は五件であり、うち四件は妻の実家、一件は妻の妹の婚家との関係である。また、部落内仲間の構成は、五反未満層の形成はないが、各階層にまたがり、結合契機は本分家、親族、下ナリ、そして二班である。個人的「友人」関係だけを契機とするものは二件にすぎない。このほか農業をめぐる仲間に、養豚仲間、農作業の共同仲間等がある。

さらに農外場面での関係をみると、高柳では農家の副業として、旧くから縄の生産がおこなわれてきた。現在、高柳は三戸の縄加工機械所有者を軸に、縄生産者が三つにグループピングされている。このグループピングは、加工機械所有者の移動につれて変化してきた。そして変化させてきたものが、家における資本の蓄積と家族内余剰労働力の存在、および粗縄を確保するための村落内地位であつた。

このほか種々の農外就労の形態があつて、就労先をめぐるいくつかのグループがつくられている。

このようなそれぞれの生産・労働を介した関係は、高柳では、あくまでも日常の生活をめぐって形成されている基盤にもとづいてとりむすばれている。それは日常の交渉関係といいかえてもよい。非農家でも、住職、自営建具商、高柳郵便局員、役場木部支所事務、農協木部支所、木部小学校用務員等が部落内に仕事場をもち、また部落外に仕事を求める家々も、それぞれに交渉関係をもち、生活の種々の側面で、高柳構成員として村落生活に組み込まれている。それらの主要なものは、部落運営をめぐっての種々の普請・行事はもちろんのこと、下部機構としていわば村組の機能をもち、寺の壇家を中心とする「同行仲間」がおこなう行事への参加、そして班の仕事や行事への出役・参加である。

高柳の部落運営は、戦前までは「頭分」と呼ばれる地域支配層を中心としておこなわれてきたが、戦後は選挙による「行政委員」一〇名に移り、それまでの頭分以外の家からも選出され、かなり広い村落内階層にわたって組織されている。また、かつては冠婚葬祭に主として機能した同行仲間が、村落生活のなかで重要な役割を担っていたが、昭和三〇年以降次第に機能を縮小させ、かわつて村落行政下部機構としての班が重要性を増大させていることがうかがえる。この班の仕事は、現在、祭りの職立て、村人足の割当て、米の出荷旅行・レクリエーションにおよび、冠婚葬祭時は同行仲間について参加が要請される。そして班長は輪番である。

これまで述べてきたような生活協同の存在は、いわば農民の側からの地域生活への対応であり、単なる国や地方自治体の行政支配下部機構としての機能をはたすだけのものではない。行政支配にたいする村落レベルでの地域対応であっても、その基盤は日常接触はともなう住民相互の交渉関係があつて、伝達や活動のための組織が、村落組織のなかに組み込まれている。そして現在の村落生活においては、村落全般にわたる私的な、その意味では必要に応じてつくりあげられた協同組織（主として村組）が、協同の契機の減少にともない、その機能を縮小していくことにたいして、村落行政の内部運営において、公的にまず第一に機能していた班——近隣組が、生活面における互助協同場面を増大させてきていることを知ることができる。それは新しい分家や来住者による戸数の増加にともなつて、家数や家並を本来的な編成基準としない村組——同行仲間の活動に障害を生じてきたことと同時に、家の自立性の進展によつて、「対等原則」がある程度一般化したことによるものと考えられる。そして「対等原則」をよりはっきりさせた形での近接居住による交渉の度合によつて組織される比重は、ますます増加してくるといえるのではないだろうか。さらにそのことはまた、生活協同の関係が、より近隣としての日常接触の可能性にもとづいてとりむすばれるようになることを示しているであろう。高柳における親族交渉が、もともと部落内婚が多く、濃密であつたとはいへ、親等の差よりも、近接居住のもたらず生活交渉の日常性に左右されることもこうした脈絡で考えられる。そしてこのような条件のもとで、「在所同窓会」

「同級生仲間」「お花のグループ」「酒飲み仲間」（旧くは「湯番」「モーター仲間」）等の個人的な仲間集団も、そうした基盤のうえに形成されることになるのであろう。機械仲間に見られるような生産・労働をめぐる仲間の形成も同様である。

もちろん高柳住民の全生活場合においては、部落外社会へその充足を求める動きが増加していることはいうまでもない。ただ、距離的には、高柳は三国町中心街に近く、また三国町が坂井町よりも諸施設の集積が多いことから、三国町とのつながりも多く、坂井町を意識するのは、地方自治体としての行政施策に関わる事柄がほとんどである。さらに、福井市中心部まで車で四〇〜五〇分ということもあつて、直接県都まで出ることも多い。しかし、そうした動きは、生活のいわばフィジカルな便益性を求めている選択的な動きである場合がほとんどである。その意味では現在といへども、家や部落に即した生活の質において、やはり村落内関係を無視することはできない。したがつて地域連帯を考へる場合にも、これまで述べてきたような近隣の諸関係を媒介とした居住組織は重要な意味をもつのであつて、村落の再組織化ということも、近隣を核とした諸組織の累重と横の連絡において考えられなければならないであろう。その意味でも、日常的な生活過程の分析にあつては、こうした日常的な対面的交渉を持続させ変化させる基底要因の分析は不可欠であろう。